比国凧あげ遠征記

機内放送はマニラ空港の天気は晴れ、気温は３４度であることを告げている。

東京の桜の花はまだ散りきっていないのに、ちょっと戸惑うような気温である。

入国手続きを終えて、屋外に出るとムーとした暑さが襲い掛かる、まさに真夏だ。

しかし心配することは無い、我々にはスペシャル・バンが迎えに来ることになっている。

少しの我慢だ、と思っていたら、現れたのは黒っぽいワンボックスの中古車だった。

そのスペシャル・バンに荷物を積み込み、乗車するとドアの内張りが紙テープで止めてあった。

ンーこのへんがスペシャルなのかな？

車は走り出したが、道路は大渋滞、日本車が意外に多く、目に付く。

燃費を稼ぐためかどうかはわからないが、車のエアコンはあまり効いていない。

横で加藤さんが大汗をかいて「中川さん暑くない？」と言っている。

「うん、ちょっとだけ」と言いながら記念に写真を撮ってあげたが、汗の様子はあまり良く写っていなかった。

ジープを改造したという乗り合い自動車、ジープニィが横を走っている。

後ろから乗降できる様になっていて、窓もドアも付いていない。

あちらのほうが涼しいのかな？

直射日光があたって余計暑さが増すかな？などと考えながらあたりを見渡す。

車速の割りに車間距離が狭い。横の車とは接触しそうな勢いだ。

突然、直進する我々の車の前を横切る車が見えた。

「ワッ危ない！なんだいまのは！」この不思議な現象が起きたところは交差点だった。

信号機がついていない、前に進む車と、横切る車が普通に走っている。

右折だろうが、左折だろうが一時停止することなく走る。

３車線の道路は車が３列になったり、４列になったりしながら進む。

中には反対車線を走っているバイクもいる。それはもうはみ出しているレベルを超えている。

これでよく事故が起こらないものだ。

これだけでももう立派な観光名所だ。すごい！

小一時間走ってやっと目的のホテルに着いた。

次の日、凧つくり教室になるところを案内してもらった。

新しいショッピングモールで、通称メガモールと言うそうだ。、端から端まで１．５キロあるとか。

中に入るのに男女別々の入り口でボディチェックを受けなければならない。

随所にガードマンが居る。

入ったところに食べもの屋さんが並んでいて、香辛料の臭いか、油の臭いか、南国風の独特の臭いが

鼻を突く。

ずいぶん混雑していて、人であふれかえっている。

１階から５階まであり、中央が吹き抜けになっている。

この吹き抜けのところで凧つくり教室を開く。

このメガモールが閉店になってから凧の展示準備することになっている。

閉店時間の９時３０分になってから展示用の凧を持って入ると店舗は完全には閉まっていないそれどころかまだ入ってくる人がいる。

入り口のボディチェックしているガードマンは制止しないで平気で入れている。

どうなっているんだろう。こんな曖昧な、どちらでも良いような状態ならもっと早い時間から準備をさせてくれればよいのに。

作業が終わり歩いて帰ることとなった。ホテルまでの距離は２～３キロくらいだっただろうか。

夜になると街が全般的に暗い、日本の街が明るすぎるかも知れないが、このあまり明るくないところの道路を何回か横断して帰ることになる。

最初の道路はほとんど車が通らないので、何事もなくごく普通に渡れた。

しかしホテルの前の道路は片側２車線ある。

歩道に立っていても車は止まってくれない。しかも横断歩道ももちろん手押し信号も無い。

地元の人らしい人が車の走っている道路を渡りだした。「危ない！」と思ったが車は速度をゆるめ、通行人を通している。

歩く速度を変えることなく堂々と歩いていけば次々に車は止まってくれるようだ。

「なるほど、ああやって渡ればいいんだな」と分かったまでは良いのだが、実際にやってみると

車道に１歩足を踏み入れたままで前へ進めない、あわてて歩道に戻る。

どうも渡る勇気が湧いてこない。

そのうちにちょっと離れたところでベテラン？らしい人が渡りだした。あわててついて行く、

しかもその人を盾にするように、車から隠れるような位置を保ちながら用心して渡る。

テレビ番組にあった幼児体験の「始めてのおつかい」のような気分である。

やっとホテルに帰れた。

腕時計は日本時間のままで、現地時間に修正していないので頭の中も日本時間のままだ。

「遅くなった。部屋に帰ってゆっくりしたい」と思う時間が少しずれているようだ。

その日の時間も腕時計はもう２４時近くを指していた。

夜に弱い私には、許容外出時間はもうとっくに過ぎている。

ホテルのエレベーターは３基あって、真ん中が動いていない。

両端のエレベーターの前には先客がたむろしていた。

こんな時のエレベーターはなかなか降りてこない。やっと右側のエレベーターが下りてきたので、

近づくとすでに満員状態で入れそうに無い。

あきらめて次のエレベーターを待つことにした。

これがまたなかなか来ない、早く動けと念じてみても、一向に降りてくる気配が無い。

やっと降りてきたので乗り込むと、そこは若い女性ばかりだった。土岐さんが乗ってくるものと思

いドア付近に立つていたが、乗ってこない。

「アッ、降りようか」一瞬躊躇したが「何も遠慮することはあるまい、ちょっとの時間だし」

と思い直し、ドアと向かい合って立っていた。

男は私一人である。これはあまり得意なパターンではない。

やがてドアが閉まり、エレベーターは上昇していった。

内部は２～３人の話声が聞こえていたが、比較的静かだった。

左後ろの方から控えめな声で「にほん」と言う声が聞こえた。

この「にほん」と言う声でエレベーター内は雑談する声が聞こえなくなった。

黙っていると今度は右後方から「お友達は？」と言う声が聞こえた。

やっぱり黙っていると再度「お友達は？」と言う。

ン、まずい！なんか言った方がいいかな、右手で左の方をさしながら

「あっちへ行った」と本人はぶっきらぼうに言ったつもりだった。

するとまた何も言わないと思ったのか「どきどきしてる？」と肩をつついてくる。

「肩をつっつくねぃ、声の一つや二つでどきどきなんざ、するもんじゃーねえ」と思っただけ。

おじさんは何も言わずに静かに立っていた。

直後にエレベーターは停止し、何人か降りていった。

もう一回くらい止まっただろうか、何人か降りていって、目的の２１階に止まったときは一人になっていた。

だれもいない廊下に降り立ったおじさんは、「けっ！大人をからかうんじゃーねー」と肩を怒らせて歩くことができた。

いよいよ凧つくり教室の日、

セレモニーが始まった。

いろいろ書いてある予定表の割には出席者が少ないような感じがした。

フィリピン国歌のあとに君が代演奏があり、大使代理の鮫島氏の挨拶に続き、国際交流基金の鈴木氏のテープカットで盛大に幕開けした。

その後各方面の方々に、日本から持ってきた凧の贈呈式を行った。

ちょっと大判振る舞いのような気もするが、初回であり、アピールも大切なのだろう。

この「フィリピン一日本　凧つくり、凧揚げ大会」が定着し、より大きな大会になってくれれば

うれしい限りである。

少し時間をとって、子供を対象とした凧つくり教室の準備をする。

机が足りないくらい大勢集まることを期待したが、意外に少ない。

完成見本をちょっと揚げてアピールすることにした。揚げ糸を伸ばして走るとよく揚がるので、

周りの人はびっくりしている様子だった。

子供たちも集まり土岐さんの説明で、凧つくりが進んで行く。

もちろん説明もいいんだろうが、思ったより順調に作ることができた。

子供たちよりむしろ飛び入りのおっちゃんが各行程毎にいちいち確認を求めてくる。

不安なのか、それともコミュニケーションを取りたいのか？

土岐さんが設計したロケットカイトは何のトラブルもなく子供たちの手で完成していった。

休憩を挟んで、今度はフィリピン凧の会の凧つくり、ボカボカカイト教室が開かれた。

説明はタガログ語でよく分からないが、ボカボカとか、サラサラとか繰り返し音が多く

何を言っているのか、どこを表現しているのか、さっぱり分からない。

それでも真剣なまなざしで聞いている子供たちの凧は完成して行く。

３回目は生徒総入れ替えで、日本チーム担当の角凧つくり。

さすが角凧は人気があった。瞬く間に人が集まってくる。

今度はロケットカイトより、手が込んでいる。何行程かをへて完成していった。

出来上がりに満足している様子がその嬉しそうな顔で良く分かる。

そのうち一人の人が土岐さんにサインを求め、書いてもらっていると、列ができてきて、サイン会に変わってしまった。

それが終わると今度はその凧を持っての撮影会。

和気藹々に進めてきた凧つくり教室も無事終わり、みんな満足そうにお礼を言いながら明日の凧揚げ教室での再会を約束して帰っていった。

さていよいよ凧揚げ教室の日。会場は大学のラグビー場である。

天気は晴れ、風は微風、江戸角にはちょっときつい条件だ。

昨日の凧つくり教室の凧に絵を描いて持ってきている人がいる。

午後になるといくらか風が出てくるとのことであったが、いつまでたっても変わらず快適な日和のままであった。

土岐さんが連凧を揚げだしたが、その連凧も時々地に着くような風であった。

夕方子供たちの凧が揚がらなくなったところで、加藤さんの６尺凧の模範展示をやることになった。

グランドいっぱいに使って風上に向かい、俊足のおじさんが走って揚げ糸を引っ張ると大きな凧がゆっくり揚がっていく。

会場から拍手が沸いてくる。

肩で息をしているおじさんが手を上げて答えているが・・・・

暗くなった会場で広げていた凧を収納する。

２日目の凧揚げ大会は日曜日で、仕事が休みの人が多いからもっと集まるよ、との話であったが

この日も気象条件は昨日と変わらなかった。

また今日も凧の虫干し。

昨夜遅くまでかかって作ったロケットカイト１２枚を両親のいない施設に入っている子供たちに

プレゼントした。

子供たちは凧をもらうとうれしそうに風のないグランドを走り回る。

１人目、２人目、３人目と次々に凧が増えていく。

子供たちは暑い太陽の日差しに負けないで走り回る。

うれしさを全身で表現しているようで、見ている私たちも嬉しくなる。

昨夜半分寝ながら作った凧は、赤いビニールテープが付いているので良く分かる。

赤いしるしの付いた凧はいつまでも揚がっていた。

日が傾きかけたころ周りの木に凧が引っかかったいるのに気が付いた。

近づいていくと中島さんが取ろうと苦戦している。あの赤いしるしの付いた凧だ。

私が着く前に凧は無事取ることができた。

ふと横を見ると、揚げ糸を出しすぎたのだろう。絡まった糸を持っている少年がいる。

その絡まった糸の先には赤いしるしの凧が付いていた。

大丈夫だよと声をかけて絡まった糸をほぐすのを手伝ってやった。

絡まったところを広げてくぐらすように指をさすと、手際よく巻きながらくぐらせていく。

これはひょっとしたら、我が家の山の神より気が利いているかもしれない、と思わせるような

手際で作業は進んでいったが、時間はおそく日没が近づいてきた。

施設の先生らしい人が少年を探しに来たのだろう、様子を見ていたがやがて、残りはホームでやりなさいと声をかけてきた。

がんばれば無理だと思っていた絡まった糸もやがてはほぐれるんだよ、と教えてやることができたらと思ったが、これ以上少年を止めることは無理であった。

少年は絡まった糸の付いた凧を持って先生に連れられて帰っていった。

その後姿を見ながら別れた少年に少し未練が残った。

そのときひょっとしたら土岐さんが揚げ糸を持っているんじゃあないかと閃いて、走っていって尋ねると予備の凧についていた揚げ糸を切って渡してくれた。

少年が帰っていったほうに走っていくと、まだ車に乗る前で彼は外に立っていて、なぜかすぐにわかった。

揚げ糸をプレゼントだといって渡すと、少年は黙って受け取った。

暗くて表情は分からなかったが、この少年達がやがて成人して、小さかったころ日本から来たという、変な格好をしたおっちゃんに、凧をもらってこのグランドで凧揚げをしたなあ、と思い出してくれれば幸いである。

こうして忙しかったような、珍しいものだらけの楽しかった凧揚げ遠征は終わった。